

病 理 診 断 学

1 担当教員名

【 研究指導教授 】 教授 都 築 豊 徳

【 科目担当者 】

2 教育目標

(1) ねらい

学生は外科病理学の基本的概念及び臨床との関係を学ぶ。具体的には、学生は色々な病気の病理学的な見方、チーム医療における病理診断科の果たす役割を体験し、習得する。学生は分子生物学の基本的概念を理解するとともに、実際にその運用を行う。

(2) 学修の到達目標

- ① 学生は HE 及び Papanicolaou 染色標本による基本的な診断に必要な知識を知る。
- ② 学生は HE 及び Papanicolaou 染色標本から基本的疾患を診断が実施できる。
- ③ 学生は免疫組織化学及び分子生物学の基本概念を知るとともに、その解釈結果を発表できる。
- ④ 学生は自らデータを解析し、正確な解釈を行うことができる。
- ⑤ 学生は自ら研究計画を立案し、その内容を発表できる。

3 授業内容

【 講 義 】	外科病理学の診断アルゴリズムを示し、学生がその内容を習得する。学生は参考図書を参照しつつ、診断方法の理解を深める。
【 演 習 】	学生は実際に標本を検鏡し、病理診断を行う。学生が実際に分子生物学的な手技を用いて、自らその結果を解釈する。
【 実験研究 】	学生が希望する症例を実際に集め、自ら HE 標本の診断、免疫組織化学及び分子生物学的検討を行い、その結果を自らが学会及び医学誌に発表する。

4 成績評価の方法・基準

- ・病理専門医試験に出題された症例と同レベルの診断が可能か評価基準とする。
- ・学生が自ら FISH を行い、正確な判定が行えることを評価基準とする。
- ・集積されたデータを学生が自ら解析し、学会などで発表する事を評価基準とする。

5 教科書・参考図書

Rosai and Ackerman's Surgical Pathology 11th ed, John R. Goldblum, Laura W. Lamps, Jesse McKenney, Jeffrey L Myers, Elsevier, 2017

Diagnostic Histopathology of Tumors 5th ed, Christopher D. M. Fletcher, Elsevier, 2019

6 準備学習(予習, 復習等)及び必要な時間

- ・実験前に3時間程度の基本知識の予習を行う。
- ・標本検鏡後には, 3時間程度の復習を行う。

7 課程修了・学位授与方針と当該授業科目の関連

- ・大学院2年目までには, 研究成果を複数の国内学会に発表を行う。
- ・大学院2年目までには, 研究成果を邦文による学術誌への投稿を行う。
- ・大学院3年目までには, 研究成果を国際学会に発表を行う。
- ・大学院3年目までには, 研究成果を英文誌への投稿を行う。
- ・大学院4年目までには, 研究成果が英文誌に受理される。

8 課題(試験・レポート等)に対するフィードバック方法

- ・学生は実施された研究はすべてレポート形式での報告を行う。
- ・不明な点は随時質問することが望まれる。
- ・内容によっては, 再提出が要求されることがある。

9 履修上の留意点

特にない

10 オフィスアワー

職名	氏名	曜日	時間帯	場所	連絡先
教授	都築豊徳	火木金	15:00~17:00	病理診断センター内部長室	内線 37410